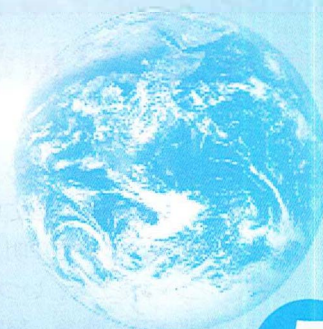


Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.5 May 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



5

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「型」について
／永尾 教昭 1
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (2)
現代社会とは何か—3つの現象から—
／深谷 弘和 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (7)
台湾伝道の黎明
／山西 弘朗 3
- ・ イスラームから見た世界 (20)
イスラームから見た死②—死者への弔い—
／澤井 真 4
- ・ 天理参考館から (28)
端午の節句に破邪を願う
／幡鎌 真理 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (21)
6. コロンビアの日常2
／清水 直太郎 6
- ・ おやさと研究所ニュース 7
2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」
「澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義」報告 (澤井義次) / 第346回研究報告会 / 2022年度公開教学講座のご案内 / 2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」 / 2021年度公開教学講座

巻頭言

「型」について

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

世界中でコロナ禍が収束したとはまだ到底言えないが、徐々に社会活動が正常化しつつある。スポーツの世界も同様で、各競技会は少しずつ観客も入れて行われるようになってきた。

ところで相撲をテレビで観戦していると、コロナ禍以降取り組み前の所作が少し変化した。力士は、取り組み前に必ず「力水」というのを口にする。桶に入れられた水を、直前の取り組みで勝った力士（験担ぎのため負けた力士はやらない）が柄杓ですくい、それを次の力士に渡す。渡された力士はそれを口に含み、口元に紙を当てて吐き出す。コロナ禍以降感染の恐れがあるので、よく見ると水を口に含んで吐き出すように見せかけて、実際には柄杓には水が入っていない。

水が入っていないのなら、この所作はやめれば良いとも思うがやめない。それは、相撲が「型」を重視するからだろう。ほかにもコロナ禍とは関係ないが、例えば微妙な勝負の場合、土俵下にいる羽織袴姿の5人の審判員が集まり勝ち負けを協議する。実際には、ビデオ室でスロービデオを再生し判断して、それを審判長にイヤホンで伝え決定されることがほとんどだが、この「物言い」と言われるシステムは決してやめない。これも型を重視し、それを伝統として保持しているのである。考えてみれば、力士の鬘や行司の衣装など、すべて時代に即していないが存続している。筆者などは、そういう型を美しく感じる。

そもそも相撲はスポーツではなく神事だと言われる。初日前には土俵の土の中に供え物がされ、祝詞が読まれる。横綱は通常神域を表す注連縄を腰に巻き付けている。相撲が型を重視するのも、相撲全体が言わば一つの宗教的儀礼でもあるからだろう。

一般的に、宗教にセレモニーは欠かせ

ない。洋の東西を問わず、どの宗教もその型を守っている。キリスト教のサクラメントなどの儀式も宗派ごとに長年同じやり方が踏襲されている。仏教の勤行もそうだろう。筆者はゾロアスター教の神事も見学したことがある。その意味するところはわからないが、やはり型がある。天理教もまったく同様だ。つとめに着用する衣服やその直前の祭儀の仕方や祭具も同じものが続けられている。

ところで宗教で用いる祭具などはもともと特殊なものだったわけではなく、一般的なものであった場合も多い。天理教で言えば円座（わらで作った敷物）も酒を供えるときの瓢箪型の容器（神酒すず）も、かつては一般でも用いる日常の道具であった。しかし時代とともに一般社会が機能性などを求めて変化していったのに対して、宗教界は型を重んじるがゆえに変えず、結果的に特殊なものになっていったのだと思う。

ただ筆者は現実の海外布教生活上で、布教を進めるに際して教団内の様々なきたりの中のどこまで、いわば型として墨守していくべきかは常に検討されなければいけないと強く思った。なぜならば、外国の場合、それらは過去にも決して日常的なものであったわけではなく、異質なものが入ってくることになり、その国の人には強烈な違和感が拭えないし、現実問題として調達も難しい。

直接つとめに使う神具、服装などは国によって変えることには極めて慎重であるべきだと思うが、もう少し敷衍して儀式に使う円座は椅子でも良いか、参拝場の装飾である御簾は品の良いカーテンではまずいかなど検討を続けていくべきだろう。さらに対象を広げて、これも一つの型として残っていると思うのだが、事務的な部分の習慣、例えば郵紙、墨書による願書類なども考えていかねばならないだろう。